

オミクロンの奴め…

吉田 真人

年末になるとベートーベン交響曲第九番の演奏会があちこちで行われる。日本特有の現象で、今やその数、数十。クラシック界のドル箱でもある。

五年前に招待券を買ったのが縁で、以降毎年聞きに出かけている。平明な第三楽章で来し方を想い起こし、合唱付き第四楽章で行く末を肯定的に考える（Freude喜び）という事で、年末に相応しいと思えるようになったからである。

▽二〇二〇年十二月十七日 みなとみらいホール（横浜）新日本フィル 指揮…広上淳一
五割程の入りで、年末の賑やかさなし。

第四楽章が始まってソリストも合唱のメンバーもいない。コロナ禍なので今日は『合唱付き』ではなく、『合唱無し』なのか、と訝っていたら、楽章の半ば（演奏中！）で漸く入場し歌い始めた。全く異例。かつてある歌手が「第一楽章から陪席し、全体を聞きながら気分を高めてゆくのが望ましい」と言っていたが、これが正論だろう。

また合唱は十六人だけ、この年末で各オケの取り合いになったのか、それともコロナで密を避けるため人数を絞ったのか。これも淋しい。

▽二〇二一年十二月十七日 サントリーホール 新日本フィル 指揮…シモーネ・ヤング
数ある演奏会の中でこれを選んだのは彼女が指揮をするからだ。五年前にドボルザークのチェロ協奏曲を聴きに行った時に、チェロが独走的に演奏するところを、彼女が上手に全体をマネージするので感心した事がある。ところがオミクロンによる外国人入国禁止措置により来日不能となってしまい、興味が半減、まことに残念！

練達の指揮代役（鈴木秀美）で、ソリストと合唱メンバー（三十二名）も第一楽章から陪席、まあ許してやるか。客の入りはほぼ満員。

コロナ禍でままならない演奏会が続いたが、良い点が一つだけ。例年この時期の演奏会には、風邪気味の聴衆が多く来る。演奏中に鼻を嚙ったり、咳をする音が絶えず、閉口する。最近健康状態に不調のある人は、例え軽症でも会場に来ないので、この点は安心だ。

2021年12月23日